

いのちの大樹

・・日本人の死生観・・

山岡荘八

太平洋戦争中の特攻隊員の体当たりは西洋人には自殺とみられた。ベトナムの焼身自殺も彼らには理解できないらしい。幕末維新当時のサムライの切腹は、彼らを戦慄させたし、日本流の仇討は、彼らには復讐としてしか通じなかった。

西洋文明の基底をなす個人主義の生命観は、生命の立体面をより高く評価しようとする東洋的な思考の方法と全く異質な、平面尊重だからである。

私はそうした日本人の生命観を「小説徳川家康」の中で「いのちの大樹」と表現した。太陽と地球があるかぎり、生命の樹(き)は枯れない。したがってわれわれは平面的には社会人として横の連絡の中に生きながら、立体的にはこの「いのちの大樹」の同じ根のうえに茂った葉であり、枝であり、幹であり、こずえであるに過ぎない。

したがって私自信が枯死しても、私の生命が死滅したことにはならない。少しさかのぼって祖父母を基点としてみると、両親、叔伯父母、兄弟と続いて、さらに子や孫の中に生き継いでいる。

この考えの中に立つと、特攻隊員の体当たりは決して自殺ではない。みずからを殺して他の枝葉を茂らせようとするもので、実はよりひろい生命の尊重に通じてゆく。ベトナムの焼身自殺はそれにさらに仏教的な信仰が加わったの結果であり、サムライの切腹は、自分の過誤をこれによって償い、わが系譜の名誉をまもりとうそうとする責任感に根ざしている。

切腹の中には後に科刑として「命じられる」場合があつたが、この場合は斬罪(ざんざい)や磔(はりつけ)などの刑罰よりも一等軽く、自らの生命を自ら手で断つことよって、縦の生命の名誉をまもる自由を与えてやる、という生命尊重の意味があつた。

仇討にしても、同じである。これは決して個人の復讐ではない。殺人事件のうちには、時に、法律がこれを罰しえない微妙な場合がある。そうした時には、法に代わって、その生命に直接つながるものが相手を討つのであつてこれを許しておくことにより、安易な殺人を禁じようという、生命尊重の精神が裏面にある。

「——理由はともあれ人を殺害すると法律によるか、さもなくばその近親者によつて討ち果たされるぞ。それゆえ決して殺してはならないのだ」

しかし、そうした考え方は、西洋文明が浸透するにしたがつて、理解されないまま「野蕃」

の一語のもとにしりぞけられた。事実、それらが浅く受け取られ、野蕃な現象もなくはなかったのだが、今日の死生観だけで、過去の日本人の行為を割り切ると、わからないことが無数にでてくる。

太平洋戦争のおりに戦場で倒れた若い人々のほとんどが、最後に「おかあさん！」と呼び、「天皇陛下万歳！」と叫んで死んだ。これは実は、日本人的な思考からすれば同質のものなおである。天皇陛下は民族という生命の大樹の中心であり、お母さんは、直接自分に続く枝葉なのである。

この生命観が、あの戦争の終わりころには、まことに悲しいはげしさで表面へ出てきたのだ。今日さまざまな戦記、戦史をたどつてゆくと、サイパン失陥後の海軍に、これが最も顕著に現れている。

当時の海軍首脳部は最後の「一兵まで戦い死ぬことよつて、民族の「いのちの大樹」」はまた新しい芽を吹くと考えたのだ。それが神風特攻隊を生む動機で、よいかげんに葉をむしられ、樹皮をはがれ、幹を傷つけられたままでは、この大樹はしだいに弱つて枯れてゆく。だが、思い切つて勇敢に、みずから枝を断つてしまえば、そこから全く新しい、歴史に耐えうる生命の芽がはえるであろうと信じて勇敢に敵の中へ突入していったのだ。日本人の生命観からす

ると、同胞は文字どおり時間を越えて一体であったということになる。

（この文書は、昭和三十九年に発足しました「予科練戦没者慰霊碑建立委員会」の顧問でありました作家の山岡荘八氏が、昭和四十二年十二月二十六日に発行しました、機関紙「予科練」の第二号に寄稿されたものです。）